

## II 青森県における公民館事業の状況

弘前大学 教育学部 准教授 松本 大

### ●ポイント

1. 平成 24 年度調査と比較すると、主催事業を行う公民館の割合が低下している。
2. 平成 24 年度調査と同様に、主催事業において趣味・教養に関する講座・イベントが最も多い。
3. 社会的困難を抱える人びとに関する事業を実施している公民館はかなり少ない。
4. 平成 24 年度調査と同様に、地域づくりを重視する公民館は多いものの、実際に地域づくりに関する事業を行う公民館は少ない。
5. 平成 24 年度調査と比較すると、「外部との連携・協働」による事業は増えているものの、「利用者や住民との協働のレベル」が低下している。
6. 平成 24 年度調査と比較すると、「学習成果の活用」も低下している。
7. 政策的示唆
  - ① 地域づくりにつながる社会教育的方法のあり方を改めて問い直し、研修等とおして共有していく必要があるのではないか。
  - ② 連携・協働の目的や意味を改めて共有する必要があるのではないか。

### はじめに

本考察では、公民館の「事業」に着目して調査結果を整理していく。青森県教育委員会では、同じく公民館をテーマに平成 24 年度に県民調査を実施している（青森県教育委員会『公民館機能に関する現状調査報告書』、平成 25 年 3 月）。そこで**本考察では、主に平成 24 年度調査と今回の調査との単純集計を比較しながら、公民館の事業に関する現状を明らかにし、青森県における政策的な示唆を提示する<sup>1</sup>**。要点は最初に示したとおりであり、その順番で説明を加えていく。

### 1 主催事業を行う公民館の割合の変化

表 1 運営状況（館長調査「問 6」） (%)

	常時開館し、 主催事業がある	常時開館だが、 主催事業はない	集会等の利用が あった際に開館	無回答
今回（令和元年度）	73.4	10.2	16.4	0.0
前回（平成 24 年度）	78.1	10.5	10.5	0.9

表 1 は、今回の調査と平成 24 年度調査の運営状況に関する結果を比較したものである。平成 24 年度調査と比較して、「常時開館し、主催事業がある」公民館の割合が減少した一方、「集会機能が主で、集会等の利用があった際に開館する」公民館の割合が増加していることがわかる。公民館は社会教育施設であり、単なる集会施設では

<sup>1</sup> なお平成 24 年度調査については、当時の単純集計表をもとに筆者の方で適宜再集計を行った。そのため、当時の報告書の数値とは異なる場合がある。

ない。社会教育施設としての公民館の柱となっているのが、住民の学習活動に対する職員による支援である。そしてその住民の学習活動に対する職員の支援の中心となるのが主催事業である。主催事業を行う公民館の減少、そして主催事業のない公民館の増加は、社会教育行政の根幹に関わることであると思われる。

なおこの「運営状況」について、「管理運営形態」（館長調査：問1）とクロス集計してみたが、直営や指定管理者によって主催事業の有無が大きく異なることはなかった。管理運営形態に関わらず、全体的に減少しているのである。

## 2 主催事業の内容

表2 主催事業回数で「回数が多いテーマ上位3つの割合<sup>2</sup>」と「地域づくりの割合」（館長調査「問7」）（%）

	趣味・教養・芸術 <sup>3</sup>	スポーツ・体力づくり <sup>4</sup>	家庭教育支援	地域づくり・地域活性化
今回（令和元年度）	46.8	20.9	9.7	5.6
前回（平成24年度）	60.2	54.0	37.2	34.5

表2は、主催事業を実施している公民館における主催事業実施回数の割合を整理したものである。平成24年度調査も今回の調査も、実施回数の多いテーマの上位3つに変化はなかった。どちらも、最も多いのは「趣味・教養・芸術」であり、その次に「スポーツ・体力づくり」が続く。青森県における公民館主催事業の約半分は「趣味・教養・芸術」であるということがわかる。

公民館の講座において趣味・教養を学ぶテーマが多いことは経験的に知られており、一般的には、そうした講座はカルチャーセンターとどう違うのかとネガティブに評価されることが多かった。しかし、特に青森県の場合、公民館における「趣味・教養」講座を一面的に否定的に評価することは避けた方がよい。とりわけ農村部では、公民館は農閑期に高齢者が趣味・教養の学びをとおして集うことで、生きがい形成に重要な役割を果たしてきている。むしろ問うべきは、「何を学ぶのか」というよりも、それを「いかに学ぶのか」ということである。「いかに学ぶのか」ということをめぐる課題については後述する。

## 3 社会的困難を抱える人びとに関する事業の現状

「何を学ぶのか」よりも「いかに学ぶのか」が重要であると指摘したが、今回の調査結果で私が最も衝撃を受けたのは、社会的困難を抱えた人びとを対象とした講座の現状である。具体的には、障害者支援に関する主催事業を実施している公民館は（館長調査「問9」）、2.1%しか青森県に存在しない。これはあまりにも少なすぎるのではないか。関係機関には早急な対応をお願いしたい。学齢期は学校教育を中心とした支援が整備されているが、卒業後の学習や社会参加を保障するのは社会教育の役割であ

<sup>2</sup> 今回の調査と平成24年度調査では調査票の選択肢が異なっている。今回の調査では、1年間の実施回数を記入してもらった。平成24年度調査では（館長調査「問9」）、「1回」「2回以上5回未満」「5回以上10回未満」「10回以上」から選択するものであった。表2における平成24年度調査の数値は、「1回」から「10回以上」までの合計回答数を、主催事業実施館数（113館）で割ったものである。

<sup>3</sup> 平成24年度調査では「趣味・芸術」

<sup>4</sup> 平成24年度調査では「健康・体力づくり」

る。同様に、若者・女性の就業や起業に向けた学び直しに関わる講座を実施したことがある公民館も（館長調査「問12」）、3.2%しかない。地域づくりに関心をもつ施設や職員は多いが、こうした一人ひとりの生活課題や「困り事」を解決することが地域づくりにつながる。なぜ地域づくりに関心はあるのに、これら社会的困難を抱えた人びとへの取組にならないのか。地域づくりの概念そのものを再検討する必要があると思われる。

#### 4 地域づくりを重視しているのに、地域づくりに関する事業は少ない

表3は、今後重要だと思う講座・イベントや、公民館が住民から期待されている役割として「地域づくり」「地域づくりの拠点」と回答した割合である。館長の約7割は、地域づくりに関する講座・イベントが今後重要だと回答し、住民から期待されている役割も「地域づくりの拠点」と回答している。これは選択肢のなかで最も多い割合となっている。また、利用者自身も約6割が公民館に「地域づくりの拠点」となることを期待しており、これも全ての選択肢のなかで最も多い。

しかしながら、表2でみたように、実際の「地域づくり・地域活性化」に関する主催事業の実施回数の割合は全体の5.6%である。公民館としても利用者としても地域づくりに多大な関心を持っているが、実際には地域づくりに関する事業は少ないのである。これをどう理解したらよいのだろうか。そこで職員の実際の業務の割合をみってみる。

表3 今後重要だと思う講座・イベント（館長調査「問15」）／公民館が住民から期待されている役割（館長調査「問16」、利用者調査「問5」） (%)

	今後重要だと思う講座・イベント（地域づくり）	住民から期待されている事項（地域づくりの拠点）
館長対象	71.3	77.3
利用者対象	—	65.3

表4 職員として実務上の比重が大きいもの（職員調査「問3」） (%)

	地域課題やニーズ	ネットワーク	学校と地域の連携	助言と指導	地域資源や人材把握	集いの場をつくる	団体・サークル育成	学習プログラム企画実施	情報提供・学習相談
今回（令和元年度）	33.4	32.5	13.1	5.1	13.8	55.5	26.5	34.7	9.1
前回（平成24年度） <sup>5</sup>	35.9	—	25.2	5.7	18.2	—	33.9	40.1	14.2

表4は、職員としての実際の業務の割合を示している。これをみると、今回の調査で最も割合が高かったのは、「地域における集いの場をつくる」で55.5%であった。ただし、この選択肢は今回の調査から新しく設けたものである。注目したいのは、平成24年度調査と比較すると、全ての選択肢において今回の調査結果が下回っていることである。表4の項目は、職員としての具体的な方法論・支援論の実際を意味しているわけだが、つまりこの結果は、それら公民館職員としての方法論・支援論が弱体化していることを示しているのではないか。地域づくりが重要な課題であることはもちろん十分理解されており、住民の集いの場をつくることもかなり意識されているが、そのための方法論・支援論が曖昧になっているといえる。表4の項目は、公民館職員

<sup>5</sup> 平成24年度調査の数値は、回答数を回答者数（401名）で割って算出した。

の伝統的で日常的な方法論であり、それぞれが地域づくりにつながる要素を持っている。にもかかわらず、それらの方法論・支援論が弱体化しており、そのことが地域づくりに関する事業の減少につながっているように予想できる。

## 5 外部との連携・協働による事業の現状

表5は、主催事業を関係機関・団体と連携・協力して実施した割合である。今回の調査と平成24年度調査では選択肢が異なっており、さらに表5における平成24年度調査の数値は「講座・研修会」に限定したものである。そのため単純に評価することはできないが、ほとんどの項目で前回調査よりも関係機関・団体と連携・協力して事業実施に取り組む公民館は増加していると言えそうである。

しかしながら、平成24年度調査と比較すると、利用者（住民）との協働による事業実施が、実態としても意向としても低下しているのは気になるところである（表6）。つまり外部との連携・協働による事業実施は増加しているものの、肝心な利用者や住民との連携・協働はやや停滞している。公民館にとって重要なのは、そこで暮らす住民自身であり、学ぶ利用者自身である。連携・協働の本来的な意義とは、利用者（住民）にとってより良い学びをつくることにある。利用者（住民）との協働は、彼らの主体的な学びを引き出し、地域づくりの主人公を育てていくうえで有益である。

表5 主催事業を関係機関・団体と連携・協力して実施した割合（館長調査「問8」）（%）

	社会教育関係団体	他の公民館	公民館以外の社会教育施設	児童館・学童保育	福祉施設・社協	小・中・高・特	大学等	NPO法人	教育委員会以外の他部局
今回（令和元年度） <sup>6</sup>	37.2	24.5	20.2	42.6	40.4	52.1	14.9	8.5	30.9
前回（平成24年度） <sup>7</sup>	22.1	5.3	8.8	-	-	10.6	6.2	4.4	8.0

表6 主催事業を利用者（住民）と協働で実施した状況（職員調査「問6」）（%）

	問6（1）利用者（住民）との協働による事業実施の経験	問6（2）事業を協働して企画・実施運営	問6（4）今後、利用者（住民）と協働して実施したいか
今回（令和元年度）	73.5	59.4	75.9
前回（平成24年度）	78.3	65.9	84.5

## 6 学習成果の活用

表7 学習成果等を活用できる場の設定や機会の提供（館長調査「問13」）（%）

	行っている	行っていない	無回答
今回（令和元年度）	26.6	68.1	5.3
前回（平成24年度） <sup>8</sup>	31.0	43.4	0.1

表7は、講座や研修の修了者に対して学習成果等を活用できる場の設定や機会の提供をしている公民館の割合を整理したものである。平成24年度調査から比べると、

<sup>6</sup> 今回の調査では、「1～2回」「3～5回」「6回以上」の3つで質問している。ここでは、その3つを合わせた回答数の割合で算出した。

<sup>7</sup> 平成24年度調査では、「講座・研修会」で連携・協力している関係機関・団体の割合。回答数を回答者数（113館）で割って算出した。

<sup>8</sup> 平成24年度調査の数値は、回答数を、主催事業を実施している館数（113館）で割ったものである。

学習成果を活用できる場の設定や機会提供を「行っている」公民館の割合は減少している。本当の意味での学習支援とは、学習者が公民館をとおして学んだことを自ら発展させていき、その人の生き方や暮らしをより豊かにしていくことである。そのためにも講座修了者を公民館のなかでつなげていき、講座や公民館そのものへの参加を発展させていくことが必要である。それが先ほど言及した、利用者（住民）との連携・協働にも結びついていく。そしてこれが「いかに学ぶのか」の1つの要素でもある。

#### おわりに — 政策的示唆 —

- ① 「地域づくり」は重大な関心事として受け止められているが、実際には「地域づくり」に関する事業数は少ない。ニーズを把握し、講座をつくり、団体を育成し、ネットワークを作っていくという公民館職員の伝統的な方法論・支援論も弱体化しつつある。しかし本来これらは地域づくりの方法論そのものでもある。公民館関係者のなかで「地域づくりとは何か」が曖昧になっている恐れがある。社会的困難を抱える人を対象とした事業も少ない。地域づくりにつながる社会教育的方法のあり方を改めて問い直し、研修等をとおして共有していく必要があるのではないか。地域課題を考えるワークショップだけが地域づくり事業ではないのだから。
- ② 平成24年度調査と比較すると、外部との連携・協働による事業は著しく増えている。これは近年の政策的な成果であるといえるが、今後は利用者（住民）との連携・協働をいかにつくるのか、利用者（住民）の学習を地域でいかに循環させていくのかということにも目を向ける必要がある。公民館に参加し、連携・協働する主体はあくまで利用者（住民）である。連携・協働の目的や意味を改めて共有する必要があると思われる。